

令和 3 年 8 月 19 日現在

機関番号：13601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02312

研究課題名(和文) 日米文化・芸術交流に果たした日本人留学生の役割に関する調査研究

研究課題名(英文) Research on the role of Japanese students in US-Japan cultural and artistic exchange

研究代表者

小野 文子 (ONO, AYAKO)

信州大学・学術研究院教育学系・准教授

研究者番号：10377616

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研では、「西洋美術」、「日本美術」という枠組みの中で捉えられてきた近代における新しい造形表現の問題や、東西の交流から生じた多様な芸術観の広まりに、幕末から明治中期にかけてアメリカに留学した日本人たちがどのような役割を果たしたのか、調査を行なった。その結果、留学創成期の1860年代末から1870年代にかけて、首都のワシントンD.C.においては、日本公使館の秘書チャールズ・ランマンが、コネチカット州においては、イェール大学のアディソン・ヴァン・ネームが日本留学生たちと関わり、彼らとの交流によって、アメリカ合衆国における日本文化理解の促進を促したことが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカ合衆国における日本美術コレクションやジャポニスムという文化、芸術における現象が、ボストンを中心に研究が行われてきた。そこで、本研究では、留学創成期における日本人留学生の現地における生活を追い、日米交流の初期の段階で、ワシントンD.C.やコネチカット州において、その後のアメリカ合衆国における日本理解を下支える素地を作り上げたことを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：The debate on new forms of expression in modern era have been discussed within the framework of 'Western art' and 'Japanese art' in the history of art. Since the spread of diverse artistic perspectives resulting from exchange between East and West, this research investigates the role of Japanese students who studied in the United States from the end of the Edo period to the middle of the Meiji period (1860s~1880s) in addressing the issues of new forms of artistic expression in the modern era. The result of this research shows that during the early years of study in the United States, from the late 1860s to the 1870s, Charles Lanman, an artist, writer and secretary of the Japanese legation in the capital city of Washington, D.C., and Addison Van Naim, a librarian of Yale University in Connecticut, were involved with Japanese students. And their dialogue promotes mutual cultural understanding and helped to promote understanding of Japanese culture in the United States.

研究分野：美術史

キーワード：東西異文化交流 ジャポニスム 留学創成期 チャールズ・ランマン ハドソン・リヴァー派 トーナリズム

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

19世紀後半は、日本とっても、欧米諸国にとっても、異文化との出会いにより自らの伝統を見直して新しい芸術表現を探究した時代であった。その顕著な例のひとつが、西洋のジャポニズムであり、日本における「日本画」の創出であろう。従来、ジャポニズムは西洋美術、「日本画」の創出は日本美術として、それぞれの領域で数多くの研究が行われてきた。しかしながら、アメリカ人の画家 J.McN.ホイッスラーのジャポニズムを出発点としたこれまでの申請者の研究では、ジャポニズムの画家(ホイッスラー)、お雇い外国人(E.フェノロサ)、明治政府の官僚(金子堅太郎)、そしてパトロン(C.L.フリーア)などのネットワークの中で東西の文化・芸術の交流が促されたことにより、それぞれの芸術家が探究した新しい造形表現に共通点が見られることが明らかとなった。つまり、ホイッスラーが日本美術にインスピレーションを受けて制作したトータルペインティング(色調画)と、日本絵画の伝統的な特質と西洋の絵画観を取り込んで創生された「日本画」に見られる朦朧体などの表現に見られる共通性は、全くの偶然とは言えず、人的交流により、ある程度の必然性から生まれたことが想像される。

こうした研究の過程で申請者が注目したのは、日米交流の黎明期、1870年代にアメリカで学んだ日本人留学生たちである。彼らの多くは幕末に士族階級の子弟として教育を受け、西洋の最先端の知識を習得するために日本のエリートとして海外へと送り出されたが、同時に彼らは日本についての情報源でもあったはずである。ホイッスラー研究の視点から、金子堅太郎に注目して資料調査したところ、金子は1871年に藩主黒田長知に伴い団琢磨らと共にボストンに留学、1876年頃から同地の社交界に出入りし、フェノロサが講義を受けていたというハーバード大学の美術史教授 C.E.ノートンや、後に岡倉天心と懇意になった I.S.ガードナーとも交流を持った。そして、1878年にボストンの文芸雑誌『アトランティック・マンスリー』に「娘節用」の翻訳を發表している。さらに、来日して日本美術に興味を持ったフェノロサを支えたのが、ハーバード大学の同窓生、金子であった。また、世代間を超えた交流も興味深い。こうした研究の背景から、本研究では、日米交流黎明期の留学生たちから次の世代に受け継がれた異文化間の交流について調査を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、「西洋美術」、「日本美術」という枠組みの中で捉えられてきた近代における新しい造形表現の問題や、東西の交流から生じた多様な芸術観の広まりに、幕末から明治中期にかけてアメリカに留学した日本人たちが果たした役割を明らかにすることである。留学生の多くは、士族階級の子弟として高い教育を受け、日本のエリートとして、欧米の先端知識や技術を学ぶために海外へ送り出されたが、同時に彼らは異国の地において日本についての重要な情報源でもあった。欧米では、日本の開国に伴う文物の流出で、日本の美術・工芸品への興味が高まり、ジャポニズムという文化現象が起こった時期でもあった。本研究の目的は、多くの日本人留学生が学んだアメリカ東海岸を中心に資料調査を行い、彼らが文化交流において果たした役割を明らかにする。

3. 研究の方法

幕末から明治中期にアメリカに留学した日本人が、同地においてどのような情報源となり、日本の文化・芸術についてのイメージ形成や交流にどのような役割を果たしたのかを明

らかにすることを目的としている。従って、基本的には資料調査を主とし、新出資料・新発見の獲得を目指す。また、関連作品が博物館、美術館に収蔵されているかどうか調査し、所蔵が確認された場合には、作品調査を行う、

先行研究を参考としながら、幕末から明治中期にアメリカに学んだ日本人留学生のリストを作成し、基礎資料を収集して文献を整理、分析する（参考文献：石附実『近代日本の海外留学史』中公文庫、1992年他）

先行研究を参照しつつ、1860年代後半から1880年代目処に、アメリカ合衆国の新聞・雑誌記事、美術雑誌等を網羅的に調査する。調査の状況によっては、20世紀初頭までを範囲として、広く情報を収集する。

と で収集した情報を整理、分析し、アメリカ及び日本の研究機関、美術・博物館において、資料収集を行う。

4. 研究成果

主に幕末期から明治時代中期（1860年代後半から1880年代）にアメリカに留学した日本人を研究対象としていることから、先行研究を頼りに、該当する期間に留学した日本人のリストを作成した。このリストからは、国家を挙げての留学政策を読み取ることができ、1865年の南北戦争終結直後から、国家として統一に向かうアメリカに学ぼうと、様々な人材をアメリカに送り込む日本の姿が見えてきた。

1865年にイギリスに密航し、その後アメリカに渡った初代駐米公使森有礼が留学創成期に日本人の若者を様々にサポートしていたことから、彼の活動とその周辺について調査を行ったところ、日本公使館で森有礼の秘書を務めていたチャールズ・ランマンがキーパーソンであったことが明らかとなった。

チャールズ・ランマンが日本公使館に勤務する前の著述家としての出版活動について明らかにし、公使館勤務時はこうした実績をもとに、日本人留学生たちが記述したエッセイを編集し、書籍として出版したことを明らかにした。

アメリカのGetty財団、スミソニアン協会のアメリカ美術アーカイブ、ナショナルギャラリー（ワシントンD.C.）、スミソニアン協会アメリカ美術館で調査を行い、チャールズ・ランマン関連資料を収集した。その結果、これまでアメリカでも研究が行われてこなかった、ハドソンリヴァー派の画家としての活動や彼の作品、画家達の交友関係について明らかにすることができた。また、ランマン自身の画家としての活動や、著述家としての執筆活動と合わせて、彼の日本との具体的な関わりが明らかとなった。

チャールズ・ランマンは、森有礼の後任として公使に着任した吉田清成と公私に渡って親しく、吉田に絵画の手解きをしていたことが明らかとなった。また、吉田の作品が京都大学総合博物館に収蔵されていることが分かり、調査を行なったところ、吉田がハドソンリヴァー派の画家たちが好んで描いたハドソン河流域や、その近郊の避暑地に妻とともに出かけて描いたスケッチ、油彩画を確認することができた。吉田が描いた作品のサイズは、ランマンが多く描いた風景画のサイズとほぼ同じであることが明らかとなった。

チャールズ・ランマン夫妻には子供がなかったことから、夫妻没後に所有物が競売にかけられたことが明らかとなり、売り立て目録を入手することができた。その中には、公使館勤務時代に日本から贈られた品々があることなどが分かった。

のリストをもとに、新聞・雑誌記事、美術雑誌等を中心に調査したところ、アメリカに馴染もうとしていた彼らが、ジャポニスムへとつながるような強いインパクトを直接的に与え

るような文化的活動を行ったという事実を確認することはできなかった。しかしながら、コネチカット州のニューヘブーンには山川健次郎などの多数の日本人が留学しており、イエール大学では、1870年代の初期に、アディソン・ヴァン・ネイムが中国語と日本語を教え、1876年には古生物学者のオスニエル・チャールズ・マーシュの寄付により2700点に及ぶ日本の木版本が収蔵されていることが分かった。ネイムの日本語習得、また木版本等の収集には、佐土原藩出身の留学生や御雇外国人のグリフィスが助力したことが分かった。また、コネチカット州において、1870年代初期からの日本文化理解が土壌としてあり、その後トーナリズム画家たちが異文化を受け入れて、江藤源次郎等との交流から「アメリカ固有の」表現とされるトーナリズム作品を描くことになった背景を明らかにすることができた。

日米関係の初期状況を把握するため、江戸末期から明治初期にかけての、日本における英語習得の背景について調査した。その結果、ペリー来航以後、外交手段として英語習得の必要性が求められたことから、それまで蘭学の中で学ばれていたオランダ語は廃れ、英語学習が主流となっていった。幕府は開港地横浜において英語学校を開設したが、その中の逸材の一人が、横浜に生まれ育った岡倉覚三であった。

1860年代から20世紀初頭までの新聞記事を追っていく中で、との関連で、岡倉天心や彼と共に渡米した横山大観、菱田春草の活動に関する記事を見出すことができた。その中で、国家として統一に向かう新しい国アメリカに、日本美術院の面々が新天地を求めた姿が浮き上がってきた。そして、19世紀後半からのグローバリズムの中において、文化的アイデンティティを模索していた日本画の表現と、日本から影響を受けて制作されたアメリカン・トーナリズムの作品の表現に類似が見られる背景について明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 小野文子	4. 巻 52
2. 論文標題 トータル・ペインティングと朦朧体 J.McN.ホイッスラーと横山大観、菱田春草	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 美術教育学研究	6. 最初と最後の頁 113-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野文子	4. 巻 13
2. 論文標題 チャールズ・ランマン邸売立て目録について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 70 - 94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小野文子	4. 巻 12
2. 論文標題 日米交流黎明期に関する調査報告	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 信州大学教育学部研究論集	6. 最初と最後の頁 91-106
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

ウェブサイトを作成し、研究業績のオンライン化を進めた。
<https://ayakoono.site>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------